曲金C遺跡発掘調査現地説明会資料

令和5（2023）年２月25日（土）
静岡市観光交流文化局文化財課

１．曲金Ｃ遺跡について

曲金Ｃ遺跡は、弥生時代後期（１世紀）から古墳時代後期（６世紀前半）にかけての遺跡です。静岡市環境保健研究所の建設計画に伴い試掘したところ、新たに遺跡が発見されました。周辺には曲金Ａ遺跡、曲金Ｂ遺跡がすでにあったため、続きの「曲金Ｃ遺跡」という名称をつけました。今回が初めての大規模な発掘調査です。

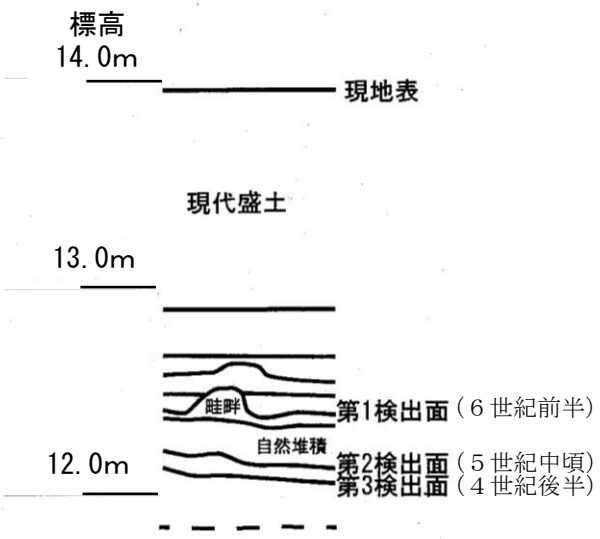
２．発掘調査の概要

（１）発掘調査の経緯

発掘調査は、環境保健研究所建設工事に伴い、建設予定範囲を対象として令和４年６月から調査を行っています。

（２）発掘調査の成果

今回の調査では、現地表下約1.5m（標高約12.5m）で古墳時代後期（６世紀前半）の水田跡（第１検出面）、約1.8m（標高約12.2m）で古墳時代中期（５世紀中ごろ）の祭祀跡（第２検出面）、さらにその下層で古墳時代前期（４世紀後半頃）の古墳（第３検出面）が見つかりました。



第１図　土層断面模式図

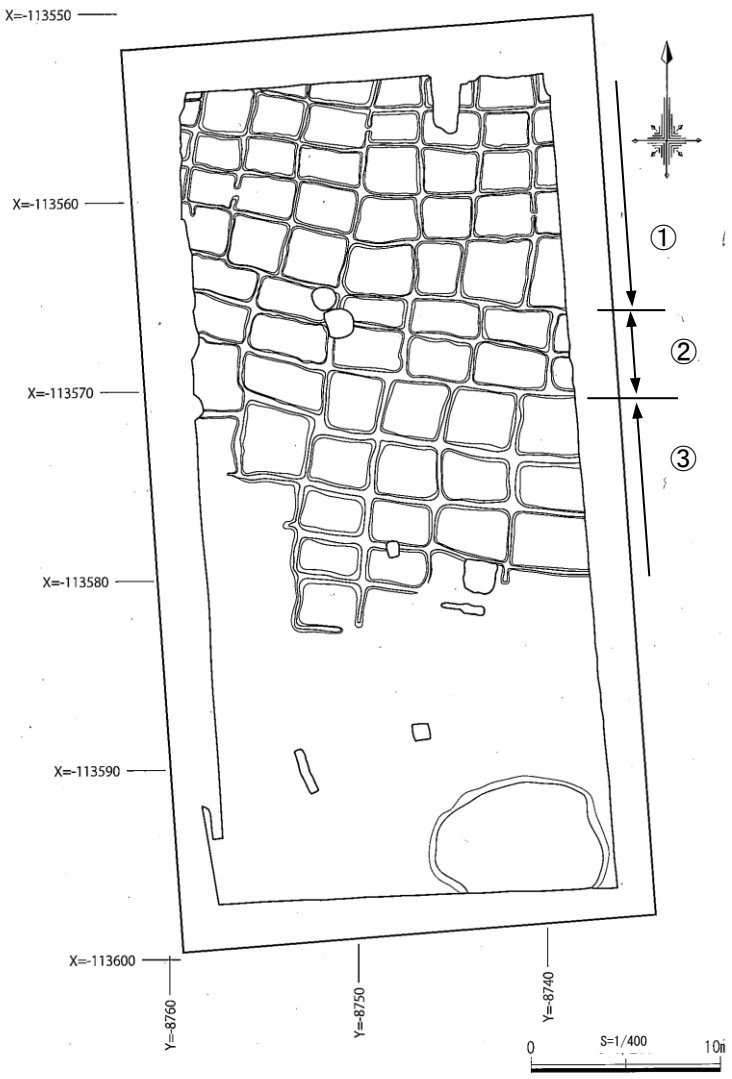
①第１検出面（第２図）

調査区の北側で古墳時代の水田跡が見つかりました。調査区の南側は、下層（第３面）に古墳墳丘がある影響で地形的に高く、水田が造られていなかったと考えられます。水田跡は幅30～80cmほどの畦（あぜ）でで区画され、調査区内で70以上の水田区画が検出されました。区画は長方形のものと正方形に近いものがあり、１辺の長さが1.2～4.2mで、１区画の面積は最大で約10.9㎡、最小で約3.1㎡です。水田の北側、中央、南側（第２図中の①、②、③）とで、水田区画の形状、大きさに違いがあります。これはまず大きな区画を造り、その中にさらに小さな区画を造っていったためと考えられます。

水田から土器などの遺物は出土していませんが、水田土の年代測定から古墳時代後期初め（６世紀前半頃）のものと考えられます。

②第２・３検出面（第３図）

古墳時代後期（６世紀前半）の水田耕作土、その下の厚さ20cmほどの洪水堆積物の細かい砂層を除去すると、調査区北端部、中央部、南東部が高く、それらの間が低くなる地形が現れました（第２検出面）。調査区中央部は北東－南西方向に土手状に高く、その北側と南側と比べて数十cmの高くなっています。これは人為的に盛土されて造られたものです（土手状遺構）。土手状遺構の一番高いとこ

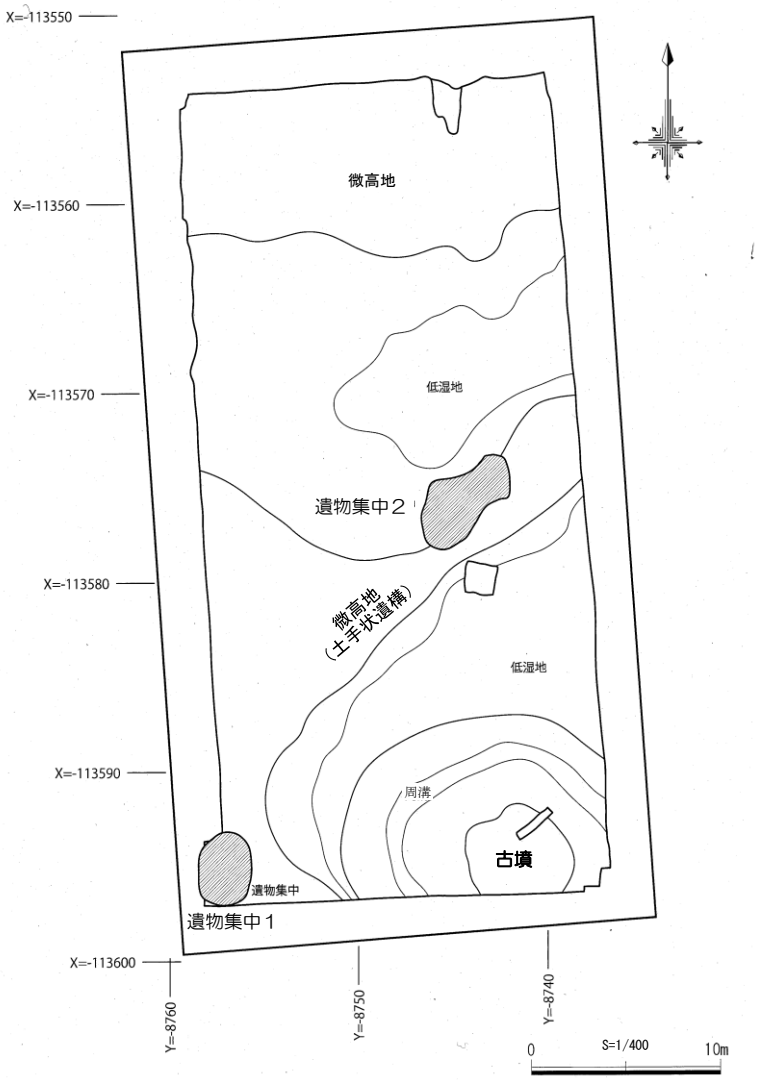


第２図　第１検出面（６世紀前半）全体図

写真１　第１検出面（６世紀前半）全景（北から）

ろから北側の斜面にかけての６ｍ×３ｍほどの範囲で、千数百個体の土器と小玉、滑石製模造品などの集積が見つかりました（遺物集中２；写真２）。出土した遺物は、祭祀（まつり）に使われたものと考えられます。同様の土器の集積が調査区南西端部でも見つかりました（遺物集中１）。第２検出面ではその他に、遺物集中１の北側、南側で土坑が見つかっています。土手状遺構の北側の低地部でも多量の木製品や土器片などが出土しています。第２検出面で見つかった遺構、遺物は、古墳時代中期（５世紀中頃）のものです。

第３検出面（第２検出面から10㎝程度下の層）では、古墳１基、溝状遺構が見つかりました。古墳は１辺約10ｍの方墳で、周囲には溝が巡っています。墳頂部から周溝の底までは2.5ｍほどの高低差があります。墳頂部では、被葬者を埋葬するための墓坑を検出しました。墓坑内からは副葬品等は見つかりませんでしたが、検出層位等から古墳時代前期（４世紀後半）のものであると考えられます。



第３図　第２・３検出面（５世紀中頃・４世紀後半）全体図（概略図）

写真２　第２検出面（５世紀中頃）
遺物集中２検出状況

写真３　第３検出面（４世紀後半）
全景（北から）

写真４　第３検出面（４世紀後半）
古墳（北東から）

（３）おわりに

今回の発掘調査で見つかった古墳時代中期の遺物の集積と同じような出土状況は、静岡県内では、宮ノ腰遺跡（焼津市）、山ノ花遺跡（浜松市）でも見つかっており、古墳時代の祭祀のあり方を検討する上で貴重な発見となりました。また、古墳は、静岡平野周辺ではこれまでほとんどが平野周囲の丘陵部で見つかっており、平野部（低地部）での希少な発見例となりました。

発掘調査は、現在、さらに下層（古い時代）の状況を確認（調査）を行っており、３月下旬に終了する予定です。